
私の師匠は超おドジ

時又玲奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の師匠は超おドジ

【Nコード】

N9945M

【作者名】

時又玲奈

【あらすじ】

私はただいま魔法の修行中。しかも、師匠は魔法のスペシャリスト！期待に胸を膨らませ、私の修行が始まったわけだが……。師匠は何と物凄くドジ！この先一体どうなるんだろう……？

(前書き)

物凄くばかばかしいです。思いつきなので・・・。

ボン！

地面から吹き出された黒いもや。

あゝあ、また失敗・・・。

魔方陣を書き間違えたのかな？ それとも呪文が間違ってた？
アクセントや発音が違うとか。

師匠がいまこの場にいれば何がいけないのか分かるんだろうけど、
あいにく師匠は低血圧だから昼まで寝ていることが多い。
こんな朝早くから起きている方が奇跡に近いくらいだ。

朝から失敗なんて凄く気分悪い。
しかも最近、失敗が一日の始まりとなっているからなおさら。

.....。

うん、朝ごはんでも作って気分転換しよう！

昨日も一昨日もこんなことを思っていた気がする・・・。

私が師匠と出会ったのは二週間前。
私がまだ村にいた頃。

「あの、すみません」

黒に身を包んだ長身の男の人に呼び止められた私は、とっさに身を硬くした。

この人、物凄く怪しい。

「な、何でしょうか？」

「僕と一緒に来てもらえませんか？」

瞬時に私は回れ右をし、脱兎のごとく駆け出した。

(絶対あの人危ないよ！ 誘拐犯だって、きっと!!!)

何で私があんな怪しい人に出会わなきゃいけないんだろう？
もしかして私って、トラブルメーカー？

「あつ、ちょっと！ 待ってよ、君！」

「ま、待ってって言われて待つ人なんていません!!!」

「あー、確かにそうだろうけど。でも待ってって！」

「いやああああ!!!」

何でこの人こんなに足速いの！？
お、追いつかれる！

「あー、もう！ ほら、捕まえた！」

肩をつかまれると思った瞬間。

「ぶぐっ!!!」

・・・ぶぐっ？

恐る恐る後ろを振り返ると、さっきまで私を追いかけて来た怪しい人がうつ伏せで倒れている。

もしかして、こけた、の？

(えっ、嘘！　こんなまっただけの所でこけるの？)

見る限りでは小石ほどの小さな障害物も見えないのだが……。

「う、うぐぐぐー！」

なんか、結構思いつきりこけたみたい。
このまま逃げた方がいいんだらうか？

ん、でも、何だかそれもかわいそう……。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

ゆっくりと顔を上げた怪しい人。
あちや、血が出る。

「あ〜?」

怪しい人は私を見据えたかと思うと、瞬く間に白目をむいてしまった!

(ヤバイ、この人気を失っちゃった!!! どうしよう、私のせいでよね?)

このままほつといたら、私悪い人確定だよ。

(……しょうがないな)

何て今日は不運なんだろう。

そう思いながら私は怪しい人を家へと運んでいったのだった。

「……………びん、びん、」

数時間後、やっと目覚めた怪しい人は私の部屋をぐるりと見回したあと、視線を私に向けた。

「ここは、私の家の、私の部屋です」

「ど、して?」

「どしてって、あなたが私の目の前で気を失うからですよ!」

「あゝ、またやってしまったのか。ごめんね、迷惑かけて」

謝るところから、そんなに悪い人ではないのかもしれない。

でも、油断は禁物!

「で、私に何の用だったんですか?」

「いやさ、宿に泊まりたかったんだけど、ほら、僕ってこんな格好だからなかなか泊まらせて貰えなくて。仕方ないから、この辺に住んでいる子に頼んでもらおうと思ってね」

あつ、それだけの理由ですか。

「でも、あそこの宿は用心深いですから、私が頼んだとしてもなかなか泊まらせてくれないと思いますよ?」

「そうのなか……。うゝん、困ったなあ」

なんか、めちゃくちゃ困ってるみたいなんだけど……。
ど、どうしよう。

「でも仕方ないか。ありがとう。この恩は決して忘れないよ」
「えっ、でもどうするんですか？」
「どうするって、仕方ないから野宿するしかないかな」と思った
んだけど」

……野宿。

いまのこの村には蛇やら蜂やらがそこら中にいるから、野宿はオススメできないかも。

「何なら、私の家に泊まりますか？」

……ん？

何言ってるの、私？

「えっ、いいの？ ありがとう、助かるよ！……！」

私の言葉に物凄く目を輝かせている怪しい人。

あっ、ここまで来たらもう引き戻せないな。

どうして私、あんなこと言ったんだろう？
口が勝手に動いたってこついうこと？

「え〜つと、じゃあ一応聞いておきますけど、あなたは一体何者
なんですか？」

「あ、僕？ 僕の名前はオクトウル。ただの旅人だよ！」

オクトウル？ どこかで聞いたことがある気がするんだけど、気
のせい？

「あの、オクトウルさんって、オクトウル・レイダ・バロンさん
？」

「えつ、何で僕のフルネームを……あー、何でもない……！」

「フルネームって言いましたよね、確かに……！ じゃあ、やつ
ぱりあなた……！」

説明しましょう！

オクトウル・レイダ・バロンさんは偉大な魔術師で、魔法に関し
てはスペシャリストと呼ばれるようなお方なのだ！

その道に入っている人で知らない人はいないと呼ばれるほど有名
で、私が唯一尊敬し憧れている人でもある。

オクトウルさんがきつかけで私は魔術師になりたいと言っても過言ではない。

「あゝ、ばれちゃったか・・・」

「どうして旅人何て言っただんですか？ 私、あなたの大ファンなんですよ！」

「そう言うのが嫌だからだよ。僕だからとか、そういったひいきをしてほしくないから、旅人を装ってきたのに。僕のバカ」

長いため息をつくオクトウルさん。

名前だけは聞いたことあったけど、実際の人物を見たのは初めてだ。

こんなに若かったなんて、正直少し驚き！

「私は別に、オクトウルさんだからとか、そういったことしませんが！ だから、自分を装うのは止めてください！」

「何で君、そんなに怒っているの？」

「そりゃ、自分が尊敬してる人が別人を装ってちゃ、あまりいい気はしないと思いませんか？」

「そういうものなのかな？」

「少なくとも、私にとつては！」

だって、もっと自分を誇ってほしいと思ったんだもん。

「じゃあ、一応お言葉に甘えてここに泊まらせてもらっね。でも、ひきだけはしないで。他の人にも僕がここにいるって言わないでほしい」

「分かりました！」

そう言うと、オクトウルさんは満足げに笑った。

オクトウルさんって、こんなに柔らかく笑うんだ。

とても意外だったけど、その笑顔は、嫌いじゃなかった。

「あの、オクトウルさん……！」

「何？」

そして私はずっと心のうちに秘めていたことを口に出す。

「私を弟子にしてください……！」

これにはかなり面食らったようだった。

オクトウルさんはしきりに瞬きをしている。

「いや、僕、弟子は持たない主義なんだけど」

「知ってます！ でも、どうしても弟子にしてほしいんです！」

「他の人に頼んでくれない？」

「オクトウルさんじゃなくちゃイヤなんです……！」

「しつこいよ、君」

そう言ってベッドから起き上がったオクトウルさんは、いきなり派手にこけた。

「あの、大丈夫ですか？」

「心配ないよ、いつもの事だ」

思いつきり打ったであろう鼻を押さえ、階段を下りようとしたオクトウルさん。

案の定、滑り落ちた。

「オクトウルさんて、かなりドジなんですな」

「ほっといてくれ」

ふくれつつらをみせられた。
何だか、凄くかわいらしい。

「オクトウルさん。あなた私に借りがありますよね？ それに、弟子がいた方がこけた時とか便利じゃないですか？」

「それはそうだろうけど、でも・・・」

「おーい、皆！ ここにあの有名な」

「僕のことと言わない約束だよな？」

後ろから口をふさがれた私は思いつきり眉にしわを寄せ、オクトウルさんを睨む。

「じゃあ、私を弟子にしてください！！！！」

口をふさいでいた手をどけ、私ははつきりとそう言った。

オクトウルさんはかなり長い間、うなったりして迷っていたけど、最後は長いため息をついてこう言った。

「君は僕がうんと言っただけで引き下がりそうにないからね。その代わり、僕の弟子は大変だよ？」

「覚悟の上です！！！！」

こうして私は超ドジな魔術師の弟子となったのだ。

ドン！ ドタゴロゴロゴロ、ガツン！

派手な音と共に低いうなり声が聞こえた。
意外と今日は起きるのが早い。

「師匠。おはようございます」

「あー、おはよう。あいててて」

「またこけて滑り落ちたんですか？ そのうち頭がへこみますよ
」？」

「君が起こしてくれればいいのに・・・」

あっ、一つ言い忘れた。

起きたての師匠はドジ度が普段の二倍にアップする。
周りにも被害が及ぶほどに。

「私は魔法の練習をしなくちゃいけないんです」

「とは言いつつ、今日も失敗してたみたいだね」

「見てたんですか？」

「音を聞いていれば分かるよ」

自然に私の顔はふくれつつらになる。

師匠はこういつとき凄く意地悪だ。

「もう師匠が転んでも治療してあげません」

「うわー、それは困る。ごめんって、ほら、謝るから」

私に近付いた途端、また師匠は派手に転んだ。

全く、これじゃあ立場が逆になってるよ。

とか何とか文句を言いつつも、やっぱり師匠はこの人じゃなきや、
と思う私がいる。

「師匠、ほら立ってください!」

師匠を起き上がらせながら、私はそつと微笑む。

この人の弟子になれてよかったと思しながら……。

(後書き)

めちやくちや長くなってしまいました(T T)
読みづらかっただらすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945m/>

私の師匠は超おドジ

2011年10月7日14時46分発行